

日水研年報, (5) : 115-117, 1959.

Ann. Rept. Jap. Sea Reg. Fish. Res. Lab., (5) : 115-117, 1959.

日本海におけるスケトウダラの標識放流調査

Ⅱ. 1959年の調査結果

尾形哲男・大内 明

Tagging Experiments of the Alaska Pollack in Japan Sea II. Results of the Experiments Made in 1959

BY

TETSUO OGATA AND AKIRA OUCHI

Abstract

The tagged experiments of Alaska pollack in Japan Sea had been conducted by members of Japan Sea Regional Fisheries Research Laboratory since 1956. Writers obtained the results in 1959 as follows:

1. The tagging was carried out four times in the coast off Echizen point as the joint work with Fukui Prefectural Fisheries Experiment Station in March 1959.

The fish tagged were estimated to count 1,161 in which only three were recaptured in neighboring areas after 21, 62, and 173 days out respectively until September 1959.

2. On the experiments in the coastal waters off Niigata in 1956-57, two of the tagged fish were recaptured after 897 and 569 days out in the Straits of Sado.

I. 緒 言

日本海におけるスケトウダラの標識放流調査は、最近では1956~57年に新潟県沖合及び富山湾において実施され、その結果(日水研1958)はすでに報告されており、再捕率がよく、良好な成績を収めている。

1959年には、日本海の北部と西部に棲息する魚群関係が不明確であることから、能登半島以西の魚群の移動生態を知るために、福井県水産試験場との共同調査として福井県沖合において本種の標識放流を実施したので、ここに放流及び再捕結果の概略を報告する。

また、1956~57年に新潟県沖合で放流されたもののうち、1958年8月以降に再捕された記録を附記しておく。

本論に進むにさきだち、多大の御指導を賜わり、御校閲をいただいた日本海区水産研究所資源部長加藤源治技官に対し深謝の意を表す。また、本調査を行うにあたり、御協力をいただいた福井県水試上野山清技師及び同所南沢篤技師、日水研佐藤信夫氏、笠原美智子氏、茶崎漁業協同組合本円太郎氏、干本三蔵氏、関野文吉氏等各位に厚く御礼申し上げます。

Ⅱ. 方 法

標識放流の方法は、既報（日水研1958）のように底層延縄漁具による釣針切断法を採用した。

Ⅲ. 結果と考察

放流年月日、放流場所及び放流推定尾数は第1表の通りである。第2表には1959年9月末日までに再捕されたものの記録を示した。

第1表 福井県沖合におけるスケトウダラの放流結果

放流年月日	放流推定尾数	放 流 場 所
1959. 3. 26	262	福井県丹生郡越廼村茶崎W/N7~9 湊
3. 27	317	〃
3. 29	353	〃
3. 30	229	〃

第2表 スケトウダラの再捕結果

放流年月日	放 流 場 所	再捕年月日	経過日数	再 捕 位 置
1956. 5. 6	佐 渡 赤 玉 沖 4 湊	1958. 10. 20	897	新潟県刈羽郡椎谷沖5湊
1957. 3. 30	新潟県三島郡寺泊町沖6湊	1958. 10. 20	569	新潟県三島郡出雲崎沖5湊
1959. 3. 27	福井県茶崎 W/N7~9 湊	1959. 4. 17	21	石川県小松市北西25湊
〃	〃	1959. 9. 16	173	越前岬北西45湊
1959. 3. 29	〃	1959. 5. 30	62	越前岬南西12湊

福井県沖合で実施した放流試験では、各回ともに2500本の標識を使用した。その切断数は予想外に少なく、切断率は12%に満たなかった。また、切断したものについての魚種別放流尾数が推定できなかった。これは、漁況が非常にわるく民間漁船が1隻も出漁していなかったことによるものである。

福井県沖合におけるスケトウダラは、3~5月が盛漁期であつて、この期間に年間漁獲高の大部分を水揚げしているのが普通であつた。そのうち、延縄漁業による漁獲高が底曳網漁業によるものに比較して常に優位にあるのが1957年頃までの傾向であつた。延縄漁業の主漁場は越前岬を起点として、ゲンタツ瀬を含む半径約40湊内の200m以深にあることから位置的にも、時期的にも放流効果については期待されたのである。しかし、福井県においては、1957年頃から漁獲高は次第に減少をはじめ、1959年春季の漁獲高は1955年の豊漁時の約1/25になり、1958年に較べても約1/5にすぎなかつた。民間漁船は、漁況がおもわしくないために他種漁業に転換するものが多くなり、必然的に漁獲高の減少に拍車をかけるようになったことはもちろんであるが、魚群の減少が切断率を低下させた大きな原因になっているものと推察される。

再捕魚の記録をみると、福井県沖合で放流したものはいずれも底曳網で再捕されているが、9月までにわずか3尾で非常に少なかつた。このことは、福井県沖合における延縄漁業や底曳漁業が不振をきわめ、他種漁業に転業したり休漁状態にあつたことが再捕率低下の一因をなしているのではないだろうか。

移動経路をみると、21日後に42湊北上して石川県小松沖で1尾、62日後には南に10湊はなれた若狭湾内で1尾、及び173日後には北西に38湊はなれた海域で1尾、計3尾の資料があるだけで、十分な論議はできないが、福井県沖における春季のスケトウダラのなかには、秋季にいたるまで近接海域にとどまつているものがあることが判明した。また、沿岸部においては複雑な移動を行つていることが類推される。

なお、1956年5月に佐渡赤玉沖で放流したものが897日後に、1957年3月に新潟県寺泊沖で放流したものが569日後に、いずれも佐渡海峡内部において同じ日に延縄漁業によつて再捕されている。

このように、1年あるいは2年以上を経過しても、なおかつ放流場所に近接する沿岸海域に棲息していることは、10月に再捕されたという事実及び過去における再捕経過の記録から考えるならば、春以外の時期に

漁獲されるものは沿岸部をはなれず、地方群として若干の地域的移動を行つているのに過ぎないものと判断される。

IV. 摘 要

1959年3月に福井県沖合において実施したスケトウダラの標識放流調査結果及び1959年9月までの再捕結果を報告した。

1. 放流場所は福井県越前岬沖合7～9湊の海域で、計4回放流を行つた。
2. 標識の切断率は約12%で、放流推定尾数は1,161尾であつた。
3. 再捕尾数は3尾でいずれもスケトウダラであつた。経過日数は21, 62, 173日で、いずれも放流場所に近接する海域で再捕されている。
4. 1956～57年に新潟県沖で放流したものうち2尾が佐渡海峡において再捕された。その経過日数は897日および569日であつた。
5. 福井県沖合における春季群のうち、少なくともその一部は秋になつても放流場所の近接海域に棲息していることが確かめられた。

引 用 文 献

- 尾形哲男・大内 明・佐藤信夫 (1958). 日本海における スケトウダラ (アカガレイ・その他の底棲魚類を含む) の標識放流調査. I. 1956～57年の調査結果. 日本研年報, No. 4 (第1分冊): 165-179.